

小関栄さんの「尊徳の弟子たち」を読んで

野口 幹夫

尊徳さんは藩の窮乏と借金による破たんを救うために、藩主＝武士階級に分度をもとめ、その余力配分によって農民には勤労に喜びを持てるように指導して成功させました。

尊徳仕法の実施に先立ち数十年の統計をもとに説得力のある資料を準備し納得させるという技量（元 IBM の伊藤公博さんも感服）もすごいことですが、支配階層にそれを用いて「分度なる搾取の限界」を教えて実行させたというような社会指導者は人類史の中にかつてないことでした。

それとともに、彼はその先のことも見据えていました。あの時代、藩体制の破たんは、決して藩主らのぜいたくだけによるのではなく、米石高基準だった経済が、貨幣経済に移っていったために起きた構造的なものでした。貨幣基準では米は米そのものではなく、米の先物取引上の単なる符牒に過ぎないものになっていました。米流通業者の寡占によって操作された米価は、天明飢饉などの時に一挙に 1.5 倍に上がったり、また急激に下がったりしました。その変化の度に貨幣操作のできる独占商人に、とてつもない富の集積が生まれ、一方武士の道義に縛られて生きる藩は窮乏の一途をたどっていったのです。

尊徳さんの思想「すべてのものに徳がある」というのは、実にこの貨幣ギャンブルそのものに向けられた反逆思想だったのです。行き過ぎた貨幣経済は「すべてのものからそれぞれの固有の徳を奪ってしまう」仕組みでした。

尊徳の時代から目を今日に移しましょう。今の政府日銀は貨幣ギャンブルの総元締め役割を臆面もなく拡大しています。インフレは人工的にしか起きないものです。人間が努力する技術は、いつの時代も、よいものを、より少ない材料と、より少ないエネルギー・労力で作ることに向けられてきました。だから時間がたてば、すべてのものの値段は下がっていくはずなのです。それをデフレと称して悪者にしたて、目標を立てたインフレを起こすため、貨幣をジャブジャブ増刷して貨幣の価値を下げることやっています。インフレは一般民衆の困窮の犠牲の上に、貨幣を操作して利益を得る人達だけが驚くべき利益を得ます。残念ながら、我々はこれに立ち向かう指導理念をもたず、ただ言うなりになってやられているのです。

我々は尊徳さんの思想に立ち戻ることで初めて、これに対抗できる理念武装ができるのです。これ以外にこの世界の困窮を救う道はないのです。

1、ものの価値そのものに立ち返れ、すべてを貨幣の価値だけに換算するな。人間よ、貨幣の亡者になるな。

2、いまや世界の全人民が不足なく食べていけることが可能になった人間の力を評価し、そこから計算して分度を定め、それを妨害している世界の 1% の富裕層に実行することを求めよう。それはアメリカで発生している「我ら 99% 運動」の理論的根拠になるのです。尊徳さんの偉大さは、時代を経ることによって、藩体制の狭い理解や、国家主義的な解釈から抜け出して、本当の偉大さが見えてきます。そのためには、掛川などの全国の報徳運動の方々が、尊徳の旗印を高くあげ続けて行かれることが重要です。それによって、尊徳さんは、世界からも再発見され、世界人類を救う指導思想としての位置を獲得していくことでしょう。